

他者を受け入れることと自分を受け入れること

香川県立高松高等学校 1年 松岡沙弥

「共存」－「2つ以上のものが争うことなく、ともに生き、ともに栄えること。」(goo 辞書より)

ここから私が論ずる「共存」とは上記を踏まえて、「人々がお互いに傷つけ合うことなくお互いの思想・信念を貫くことができること」を指す。つまり、必ずしもお互いの思想を認める必要はない、ということだ。人間が自分と違うもの(人種や思想など)と対峙した時、拒絶してしまうのは当然だ。なぜなら人間には「防衛本能」というものがはたらくからだ。野生動物が自分とは違うグループから自分のテリトリーを守ろうとするのと同じである。このような本能が備わっているのだから、自分とは違う思想を認めるのは極めて困難なのだ。だから、必ずしもお互いの思想を認める必要はない。だが、相手を傷つけないためには相手に対して「寛容」である必要がある。「寛容」とは、自分とは違う思想に対しても「こういう考え方もある」と割り切ることができる、ということである。

ただ「寛容」になれと言われたとしても、世間一般では良しとされていないもの(犯罪行為は除く)を好むような思想を割り切るとするのは困難だ。他にも、自分が好むものに反発する相手に対して、「寛容」になれとまで言われてしまったら、さらに困難になるだろう。そこで、私は場合に応じた「寛容」になる方法を考案した。

① 人権問題に関わらない話の場合

これは「私はこの野球チームが好き」等の人権問題に関わらない意見・思想の相違に関しての話を指す。この場合、意見・思想が違う人とは距離を置けば、解決する。人はそれぞれ育ってきた環境があり、それが元の性格と関わり合って思想が形成されている。そして、それぞれに譲れない意見がある。譲れないものに対してはどうしても理性的になれなくて、他を排除しようとする。それによって相手を傷つけるのを防ぐために距離を置く、というのは相手や自分を思いやった結果であり、相手の意見は相手の意見として批判せず、自分の意見も貫くことができる選択なのだ。だから私はこの選択は「寛容」な選択であり、共感できない他者と「共存」できる選択だと考える。

② 人権問題に関わる話の場合

これは人種・セクシュアリティや障がいがある方に関する事等の人権問題に関する思想・意見の相違に関する話を指す。世間一般でマイノリティとされている人々の人権問題に関する思想・意見については受け入れがたいものが多くあると思う。だが、そこで①のように思想・意見が違う人と距離を置くだけでは、人権問題から目を背けることになり、人権問題への自分と違った思想に苦しむ人々を置き去りにしてしまう。これは共感できない他者

を傷つけていることに他ならない。「寛容」な心を持った上で、苦しむ人々と話し合っその状況を変えていく必要があるのだ。「寛容」になるためには、自分と違うものを排除するような考え方を改める必要がある。前文のような考え方（心理）を「内集団バイアス（内集団ひいき）」という。「内集団バイアス」がはたらくと仲間内をひいきする上、仲間以外が自分達に危害を加える存在であると警戒して、仲間以外を攻撃することもあるのだ。そしてこの「内集団バイアス」が強くはたらきやすいのは、潜在的自尊心が低い人であると明らかになっている。

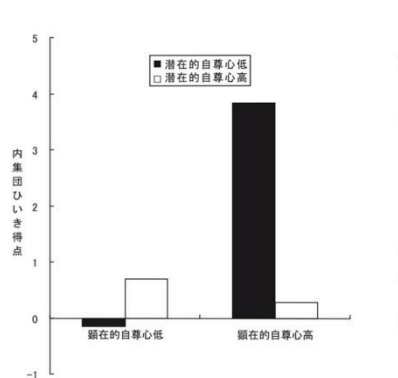


Figure 3. アルバイト代の負担場面における内集団ひいき

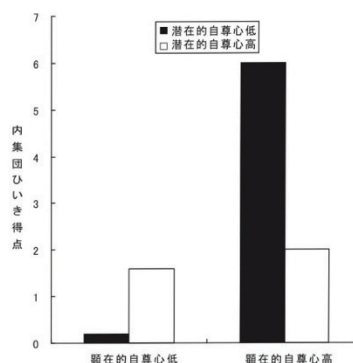
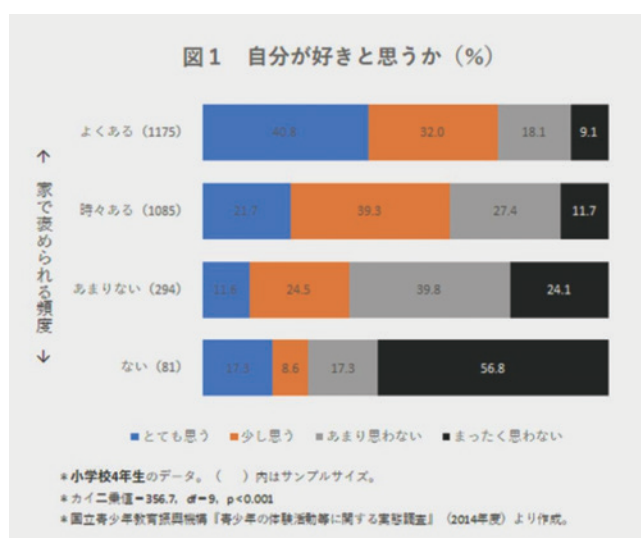


Figure 2. 奨学金の分配場面における内集団ひいき

出典：「顕在的自尊心と潜在的な自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果」

つまり潜在的自尊心を高めれば、自分とは相容れない他者に対する攻撃は少なくなるのだ。ただ、潜在的自尊心を上げていくのはそう簡単なことではない。潜在的自尊心、すなわち「自分はかけがえのない存在であるという自信」は今まで育ってきた環境に、大きく左右されることがわかっている。



出典：「自分に自信がある子は親からの褒められ経験が豊富」

上のグラフより、親が子供を褒める頻度と子供の自尊心は深く関わっていることが分かる。このように他者への攻撃性と、自分の自尊心には根深い関わりがあるのだ。つまり人々がお互いに傷つけ合うことなく「共存」するためには、まず、それぞれが自分の心を整えなければならない。そのためには、自分の心の状態を知ることが必要であると考え。今自分がどう考えているのかをノートに記録していったり、頼れる人がいればその人に自分の感情を打ち明けてみたりすることを続けていけば、少しずつ自尊心が育っていくはずだ。しかし、それにも限界がある。だから、国や県、市などの支援も必要だと思う。例えば教育機関である小中学校、高校、大学等のスクールカウンセラーの方の人数を増やしたり、相談ダイヤルに関しての団体に税金を使ったりすれば、それぞれの心が整っていくはずだ。さらに、世の中を柔軟に変えていこうとするその姿勢からも「寛容」は広がっていくのではないだろうか。

私達の思想は私達を取り巻く様々な環境に影響されて形成されている。だから、それぞれに違いがあり、対立するのは本能的なものあり、自然なことだ。だが、対立によって他者を攻撃するのは「共存」できているとは言えない。だから、そもそも対立する人と関わらない、という選択肢もある。だが、対立によって傷ついている人がいるというなら、話は別だ。まずは、それぞれが自分の心を整えて他者と関わることで「寛容」になることができ、視野が広がり、自分の思想の中だけでは見えなかった新しい世界が見えてくるのではないだろうか。他者と「共存」するには、まずは自分の心と「共存」する必要がある。私達が今できることは、それぞれが自分の心を大切に、「寛容」の輪を広げていくことである。「共存」とは必ずしも他者との間のものだけではないのだ。

出典 goo 辞書

日経 woman

「顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果」

(原島雅之 小口孝司)

「ゼロからわかる心理学」(ニュートンプレス)